

## 第10回国際農村医学会印象記

福井県立精神病院長 草野 亮

### はじめに

東欧の古い歴史と、太陽と自然に恵まれた国、ハンガリーで、1987年8月27日より30日までの日程で、第10回国際農村医学会が開催された。

その国情にふさわしく、古い大学都市ペーチ市のペーチ医科大学で、学問的雰囲気の中に、質素にしかしすがすがしく行われたことが印象的であった。

学会発表は、特別講演2題、指定講演4題、一般演題159題で、日本からの演題は指定講演1題、一般演題38題の多きに達した。私は前回(1984年)のクライストチャーチ(ニュージーランド)について、二度目の参加であったが、日本が農村医学の先進国として、国際農村医学会の中で重要な位置をしめていることをあらためて認識した。

北陸からの参加者は、富山県からの寺西秀豊(富山医薬大)、寺中正昭(城端厚生病院)、松井 亮(同)、石川県からの中川秀昭(金沢医大)、福井県からの私であった。

### ハンガリーとペーチ市について

ハンガリーは、ソ連、チェコスロバキア、オーストリア、ユーゴスラビア、ルーマニアに囲まれた国で、その面積は9万3千平方キロメートル、日本の広さの約 $\frac{1}{4}$ に当る。人口は1071万、日本の約 $\frac{1}{10}$ である。民族は、中央アジアに起源をもつハンガリー民族(マジャール族)で、ヨーロッパにおける唯一のアジア系民族である。御承知のごとく、社会主義国で、人民共和国制をとっている。気候風土

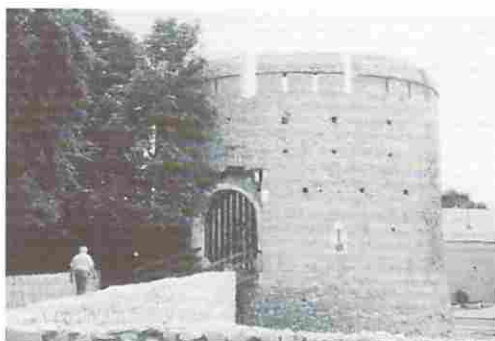
と肥沃な土地に恵まれた、豊かな農業国である。協同組合や国营集団農場によって運営されているが、一部自宅の裏に小さな島が自由地として認められている。

ペーチ市は、ハンガリーの南端に近いメチェク地方にある。メチェク地方は、ドナウ河の西側に広がる平原で、高い山がみられず、もっとも高い丘でも海拔682メートルに過ぎない。平原には、季節に応じ、広々とした小麦畠、とうもろこし畠、ひまわり畠が延々と続き、有名なワインの産地でもある。ペーチ市は、中世、とくにトルコとの交戦上歴史的に重要な役割をもった地域で、古い壮麗な教会や大きな古城など歴史的なモニュメントが今も多数残っている。4世紀にわたるローマ統治、キリスト教支配、トルコ支配などの歴史の変遷が、その街のあちこちに、多彩に色づけされて残っている。

現在のペーチ市は、人口約20万人、ハンガリーでは5番目の都市で、文化の香り高い大学都市である。バレエ、演劇、美術などの芸術も盛んで、すぐれた陶磁器作品もここから



ペーチ市



鉄扉のある古城の入口

産している。

### 学会報告

大きな樹立ちに囲まれたペーチ医科大学の大講堂で開会式が行われた。8月27日の午後6時からで、われわれ日本人一行は、長旅の疲労と蒸し暑さに閉口気味であった。前日の午後8時に成田を出発して、当日の午後4時（現地時間）にブタベストに着き、すぐにバスに乗り換え、パトカーの先導で、開会式直前に到着したばかりであった。31時間の飛行機とクルマの長い旅であった。

開会式は、学会組織委員長、国際農村医学



ペーチ医科大学

会長、厚生大臣などの歓迎の挨拶のあと、引き続いて、WHOのEl Batawi氏の「世界の種々異なった地方の農業労働者の健康」と、開催国ハンガリーのSoós教授の「過去50年間に於けるハンガリー農業生産物と人的因子」の2つの特別講演が行われた。



学会開会式

周囲が薄暗くなった午後8時半から、近くの古い大聖堂で、おごそかな中にオルガンコンサートが行われた。暗い、高い天井の奥のパイプオルガンから流れるバッハの調べは、靈気を含み、恐ろしく敬虔な気持ちにさせられた。多くの聴衆達も長時間音もなく、寂として聞いた。



オルガンコンサートのあった大聖堂

当日のプログラムがすべて終了し、大聖堂から出たときは、日はとっぷりと暮れ、広い石畳の広場は真暗で、あぶなげな足元を踏みしめながら、ゆっくりと歩いた。暗い夜道を歩くのは何十年振りかなと思ひながら、田舎の涼しい風は頬に心地よかった。

学会2日目は、午前8時30分から指定講演で始まった。まず最初に、日本の若月俊一院長が「日本の農村医学の展望」で口火を切り、ついで東ドイツのKnabe教授の「農村医学会ヨーロッパ圏におけるこの10年間の作業について」、ハンガリーのPodenの「農村経済

における生活および労働条件形成に関する問題」、中国の Zikuan の「中国農村におけるプライマリヘルスケア」の講演が続けて行われた。それから、159題にのぼる一般演題が、3日間にわたって、4分科会場で繰り広げられたのであった。

### 一般演題から

農村医学の領域は広範であり、農村におけるプライマリヘルスケア、健康増進、生活変化と労働条件、母子保健、栄養、中毒、寄生虫、予防医学などの各テーマに分類されて発表があった。討議も活発で、盛り上がった雰囲気を感じられた。今回は開催国ハンガリーの熱意はすさまじく、提出演題が多く、ハンガリー語で発表された。しかもスライドもハンガリー文字であったため、英語の同時通訳があるとはいえ、非常に理解しがたかった。ハンガリー語は音韻も文字（語）も、私どもがこれまで接して来た外国語のいずれにも似ていない独特の言語であったためである。

さて、北陸関係者の発表演題は下記のごとくであった。

寺西秀豊「和ナシ人工授粉作業による花粉アレルギー」

寺中正昭「成人病予防に関するコンピュータープログラムの開発」

松井 亮「子宮および乳癌の夜間婦人検診の総括」

中川秀昭「日本の農村における脳卒中の発

生および生存率について」

草野 亮「日本の農村地帯における女性のアルコール依存について」

この学会で、とくに私の目を惹いたのは、アルコール関連演題が多いということであった。アルコールと農村の健康問題が、とくにこの主催国周辺では重要なテーマであることが感じられた。以下に列記すると、

「農業および工場労働者における青年の飲酒習慣の比較」（ハンガリー、Jeges）

「農村人口のアルコール起因性死亡率の分析」（ハンガリー、Angelus）

「追跡調査による農村小児人口における危険因子としてのアルコールの役割」（ハンガリー、Horvath）

「農村女性の妊娠中における危険因子（アルコールなど）について」（ハンガリー、Kobor）などであった。

私も女性のアルコール依存についての演題を提出していたので、発表前から私とディスカッションしたいという青年が私を捜し廻ったり、私の発表の際も2、3の質問があったり、その熱心さ振りを私は肌で感じた。

私の専門領域である精神医学関係の演題は、これまでの農村医学会では発表されることが少なかったが、今学会の「農村住民の神経症的症状について」（ハンガリー、Buda）は興味を惹いた。農村における神経症状の発現率が近年著しく増加していることを報告し、なかでも身体症状に結びついた心身症的訴えが多く80.4%にも達していたという。そのなかで、疲労・疲弊が56%ともっとも多く、適応不全や胃腸症状を保ったものも多かったという。男性55%、女性45%の割合で、男性にやや多い。農村の近代化、都市化が進むにつれて、ストレスも増加し、従来の身体面のみならず、精神面の対策にも力を入れる必要があることを示唆していた。



一般演題風景

## ハンガリーの農村医療に関すること

開催国ハンガリーの事情について、特別講演 Soós および指定講演 Poden から抜粋して述べる。

ハンガリーは天然資源に恵まれた国で、国土の70%が農業である。気候が良く、生産性が高く、牧畜も可能である。

しかし、50年前にはヨーロッパでももっとも遅れていた。この50年間の間に農業技術の改善が急速にみられ、エコノミーも上昇した。農業所得の当初7%が25%にまで増加した。社会主義国の中でも農業の推進がもっともみられた国である。農業協同組合が国内に1,200カ所あり、最近では穀物の生産より牧畜に力を入れており、肉牛、酪農の上昇傾向がみられる。輸出も、農業生産物の占める割合が増加して、全体の25%にもなっている。過去25年の間には、バイオロジー、化学面の研究も進歩し、最近はバイオテクノロジーの導入も盛んである。これらの農業生産の増加には、国民の勤勉さと健康増進への努力がプラスの要因として働いた。農村の健康教育の面からみれば、高等教育を受けるものが多くなり、農業専門学校卒が50%以上となった。そこでは、農業事故防止に関する教育に力を入れている。また、一般農業労働者に対しても、農薬中毒に関する教育や定期検診に力を入れている。無医村地区がなくなり、診療所が各地に適正配置されるようになり、「文化の家」運動を推進して農薬中毒の予防や農作業事故防止をはかり健康増進に役立っている。かつての農村の人々はみなやせていたが、最近では肥満している人が多く、却ってやせる教育が必要となって来た。一方、若年者の都会志向の傾向とともに農村は高令者が多くなった。また、農村に高層建築が建って、都会化傾向も現われて来た。これらのことにより、健康対策問題に変遷もみられ対応に配慮しなければならないようになった。

## 農業協同組合見学

学会第2日目の午後2時30分より、スタディツアーが行われた。私どものグループは、ペーチから約26km離れたシャードという農業協同組合を見学した。農場の一面に集会場として独立して建てられた建物に案内された。ふとった農業協同組合長以下5、6名の男女が一行に並んでわれわれに歓迎の挨拶をした。農協長の横に中年の女性が法律関係者と紹介されて立っていたが、どんな仕事をするのか一寸不審に思った。バリバリの党员であろうか。

農協長らの説明によると、この農協傘下には20の部落があり、総面積は9,200ヘクタール(92,000平方キロメートル)であるという。人口は約5,000人である。この地域に割り当てられた主要産業は家畜の飼育である。2,350頭の牛、10万羽以上のキジ、アヒル、135万羽のニワトリがいる。また、1,200ヘクタール(12,000平方キロメートル)の小麦畑の他、大豆やライ麦も栽培している。平均的な農家の1カ月の収入は65,000フォリント(195,000円)である。この国は生活必需品は安く、ぜいたく品は高価である。従ってこの月給で中流の生活が営める。もちろん農業形態は、国有地を全員協同で働きノルマによって給料をもらう。技術者は優遇され、高い給料をもらう。この農協傘下には、技術者72名、熟練労働者350人いると誇らしげに立て続けに説明した。

ついで、保育所、幼稚園、老人ホームの3カ所の施設訪問をした。保育所や幼稚園は新築された新しい設備、とくに給食の器械や遊具、体育館などを案内されたが、とくに目新しいものはなかった。老人ホームは、平屋立てのやゝ古い建物で、通所システムをとっており、現在20名の老人が自宅から通っているという。80才代の愛想のよい老婆達(女性が多い)が、刺繍をしたり、談話をしたり、散歩をしたり楽しくやっていた。カメラには積極的で、愛想よくおさまった。

見学が終ると、最初の集会場に戻り、テーブルの上には自家製のハム、チーズ、肉類や果物などが並べられ、ワインなどで歓迎を受けた。陽気な人達が多く、言葉は通じないがゼスチュアで交歓の実をあげた。英語を知っている人も少なく、片言のドイツ語でようやく通じることもあった。長時間お客を引きとめるのが歓待らしく(?)、予定時間がとっくに過ぎたのになかなか解放してくれず、次の予定時間ぎりぎりの午後7時頃になって、ようやく“釈放”してくれた。

### ハンガリー雑感

日本からハンガリーは遠い国だという感慨をもった。私どもの乗った飛行機は北廻りルートであったが、ブタペストに直接入る便がなく、東ドイツのフランクフルトで乗り継いだ。フランクフルトに着くまでも、アンカレッジとハンブルグに給油のために小休止した。

ようやく着いたブタペスト空港は、予想に反し明るく立派で近代적であった。東欧といえば暗いイメージがあり、かつて旅したモスクワの空港を思い出したからである。そこはなんの装飾もなく、ただのコンクリートの巨大な箱という感じで、暗く陰気であったからであった。しかし、ブタペスト空港ビルの玄関から外に出た途端、軍服姿の兵隊達が目につき緊張した。しかも、私どもの乗ったバスの先導をパトカーがつとめるというので、びっくりした。しかし、それは行動の自由を制

限するためではなく、学会の開会式に間に合わせるための学会事務局の配慮からであった。

#### i) ブタペストからペーチへ

学会はペーチ市で行われるのであり、ブタペストからクルマで約4時間の行程である。この国の厚生大臣はじめ、各国の来賓やテレビ局が待ち受ける開会式に、日本からの大集団全員が遅れると困るというので、パトカーによる国賓なみの護衛(?)となった次第であった。赤信号を無視し、渋滞する前の車をすいすいと追い越して、スピードで突っ走るのは、日本では滅多に出来ることではないので、私どもの気持も満更ではなかった。

私どもの乗ったバスは、イブスというこの国の一流観光会社の観光バスであったが、クーラーもなく、固いシートでリクライニングもついてなかった。この国のバスは、ほとんどそのような仕様だという。ハンガリーはまだ残暑が厳しく閉口した。天井に四角な空気入れの穴があり、その蓋を持ち上げると、走行中に風が入るようになっている。

空港からブタペスト市街に入る。石造りの古い大きな建築物が目立つ。第二次世界大戦でこの市街は潰滅したというが、戦後復興した建物が現在に至っているのであろう。市街の道路は4車線から一部6車線と広いが、車の混雑がひどい。両側の建物と建物間の小路は未舗装で狭く汚い。表と裏の顔をかいま見る思いであった。

市街地を過ぎ郊外に出ると、日本のような



ブタペスト空港



ブタペスト市街

屋根型をもつ、茶色いレンガの平屋の家が続く。さらに郊外に行くと、工場群があり、その近くには新しくコンクリート建ての高層アパートが目立った。ソ連が建設したという、いまでは旧式の原子力発電所も遠くに見えた。それらを過ぎると広い平原が続く。とうもろこし島とひまわり島が、延々と広がっている。規模が大きい。その間に点在する休耕地には焼けあとが見える。焼畑農業を思い出した。その原始的な方法と近代の機械化営農をうまくコンバインさせている。点在する村をいくつか通り過ぎた。そこの立木は、どれも丈が高く、空高く真直ぐに伸びている。日本の木のような低いいじけた様子は全然みられない。そのような違いは、ハンガリーの澄んだ太陽と肥沃な風土のせい、古い歴史のせいであろうかなどと思いをめぐらせながら、窓外の景色を楽しんだ。



工場群



ひまわりととうもろこしの島

ii) ペーチの街から

学会出席の忙中に閑をもとめて、街の中に出掛けてみた。

一般市民の生活に触れたいと、デパートに行ってみた。入口でカゴを持って、好きなものをカゴに入れてレジのところにもって行ってお金を払うシステムで、日本のスーパーと変わらない。私が物色をしていると、男子店員が品物をゼスチュアですすめてくれた。しかしあっさりしたもので、どこかの国のようにはしつこくはない。



市民のデパート



デパート前の賑い

つぎに、食料品店に入ってみた。商品の陳列は無造作で素朴である。日本の店のような上品さはない。果物や野菜をみて驚いた。桃やりんごは小さく、どうみてもうまそうではない。しかもあちこちにうち身があったり、

黒いシミがついているのを平然と売っている。日本では到底売れない代物である。キャベツを見てまた驚いた。レンコンのようにあちこちに虫くい孔があった。

うち身の桃やりんごは、一般市民の食料品店だけかと思っていたら、ホテルやレストランの夕食会に出されたものも同じであった。

資本主義は競争原理があるが、社会主義国には競争がないといわれる。良いものをつくらないと売れないということがない。だから品種改良も遅れているという。品物の質よりも量が優先し、沢山生産すれば、ノルマも達成され、給料も多く支払われる。このようなことを、日本人グループの誰かがつぶやいていた。

店を出て、足まかせに歩いてみた。この町には、新しい高層アパートが目立つ。何棟も林立していて、その間にはレンガを敷きつめ、一部に花壇もしつらえてある。一階に瀟洒な



高層アパート群



下町の民家

喫茶店などもあった。一方、下町の方に行ってみると、古い茶色のレンガ造りの小さなアパートも目立った。この国も給料に応じた程度のアパートに住んでいるという。

### iii) サンディマーケットのこと

この国は、すべての店が土曜の午後から日曜日一ぱい、完全に閉鎖する。うかつにも、このようなことを知らなかった私どもは狼狽した。学会が終ってからゆっくりとお土産の買い物をしようと思っていたからであった。「毎週日曜日に、サンディマーケットが開かれているから、そちらでお土産物を求めたら」といわれ、そちらに行ってみた。

ペーチ市の郊外の広い市民広場である。順番に番号札が立ち並び、近郷近在から集って来た市民達が、自宅から持ち寄った思い思いの品を、地面に布を敷いて売っている。輪島の朝市みたいなものだなと思った。しかし、売っている品物は、不要の古着や子ども服、陶器類やこわれた時計、古いエンジンや中古自動車から外してもって来た部品などなど…。日本ではゴミ捨て場に捨てられて、誰も見向きもしないような代物ばかりであった。「所かわれば品かわる」の例えで、この国の人々は捨てるものがない位に堅実に利用して、このようなものでも売れるのだなと感心した。日本へのお土産になるものがなかったので失望したが、ようやく刺繍ししゅうを売っている一画を見つけて購入した。その店は日本人客ばかりで、またたく間に売り切れてしまった。ここへ来て日本人のすさまじさをあらためて感じた。

## む す び

あまり訪れる機会がなかった東欧諸国の一つであるハンガリーでの学会に出席する機会をもった。

ハンガリーは、質素で勤勉な国民性であるという印象を受けた。

この学会も、最近の華やかなマンモス学会とは異って、落ち着いた医科大学の中で、素

朴な雰囲気ですすめられたのが印象的であった。かざりといえば、演題に置かれた生花程度で、それがハンガリーの良さをかもし出していた。演題発表では討議がさかんで、熱気が感じられた。とくに地元の熱心さには感心させられた。観光都市のブタペストではなく、大学都市ペーチでの学会であったことが幸いであったと思う。

ペーチ市は歴史的遺産の残る静かな文化都市で、由緒ある大聖堂でのオルガンコンサートと古城の中での夕食会はいつまでも心に残る思い出である。

わずか1週間のとんぼ返りの旅行で、往復の飛行機の時間のみが長く感ぜられたが、それなりにコンパクトで充実した旅であった。